

研究主題 体育における身体接触の実践的研究

要約:本研究の目的は、「身体接触によって、子どもたちの身体に何が起きているのか」を解明することによって、体育における身体接触の意味を明らかにすることである。そのために、現象学的手法を研究方法の基礎にして、実践場面に焦点をあてて研究を進めた。授業観察から身体接触の現実を観察し、身体に関する諸概念を活用しながら分析し、身体接触の存在根拠について考察した。本研究の考察から、1) 身体空間の編みかえ、2) 身体の感じのすり合わせ、3) 共通了解の促進、4) 運動実践の調整機能という4つの意味を、身体接触の存在根拠として取り出すことができた。このことから、体育における身体接触が、集団の一体化に対して影響を及ぼす可能性を見ることができた。

キーワード: 身体、臨界点、感性的経験、行為の判断規準

I 研究の動機

筆者が23年間の教員生活の中で、重要視していたのは、学級づくりである。なぜなら、学級は子どもたちにとって生活の場であり、学習の土台だからである。つまり、子どもたちにとって、学級生活が安心できる環境であることは、豊かな学習を保証することにつながるからである。そのような指導経験から、身体接触が子どもたちの良好な関係づくりや雰囲気づくりに極めて効果があるという実感を得てきた。つまり、言葉ではなく、身体ごとふれ合うことに何か大事なものが潜んでいるに違いないと感じてきた。

しかし、身体同士がふれ合うという身体接触の経験が、なぜ子どもたちの良好な関係づくりや雰囲気作りに効果があるのか、筆者はその理由について十分に答えることはできない。身体と身体が接したり、ふれたりすることは、そもそも私たちにとって一体どんな意味があるのだろうか。この身体接触の意味(存在根拠)が明らかにされるならば、これまでの体育の授業づくりに「子どもたちの身体関係」を見つめるという新たな視点が提起されることとなるだろう。

II 研究の目的

本研究の目的は、「身体接触によって、子どもたちの身体に何が起きているのか」を解明することによって、体育授業における身体接触のもつ意味(存在根拠)を明らかにすることである。

III 研究の方法

本研究では体育授業における身体接触の場面を取り上げ、市川やメルロ＝ポンティの身体論に依拠しながら現象学的手法を駆使して身体接触の意味(存在根拠)を探求する。

(研究の流れ)

(1) 文献による考察方法の検討

- ・現象学的手法の検討(現象学的還元、志向的内在)
- ・身体(接触)に関する基本的概念の検討

(2) 授業観察に基づく事例の検討

- ・体育授業における身体接触の場面と行為の抽出
エスケン、組体操という身体接触が数多く出現する活動を観察対象とした。この二つの活動は、筆者が実践経験の中で、身体接触の効果を最も実感した活動である。エスケンについては、新潟県T小学校5年生児童を、組体操について

は、石川県F小学校5, 6年生児童を対象に観察を行った。

- ・行為の実的意味と志向的意味の洞察
- ・場面の解釈
- ・事例検討のまとめ

(3) 身体接触の意味 (存在根拠) の解明

IV 研究の内容

(1) 文献による考察方法の検討

まず、授業観察および事例検討のために、その方法的基礎となる現象学的手法について検討した。授業の「あるがまま」の現実を捉えるために、現象学的還元的重要性を理解し、先入観をできるだけ排除するという手法を修得することに努めた。そして、行為の存在根拠を明らかにするために、実的次元と志向的次元からの解明の手続きとその必要性を把握した。

また、身体については、精神と身体が独立して実体的に存在するというような心身二元論的な捉えではなく、それらは分かちがたく統合されたものとして捉えた。われわれが現実を生きているというとき、「生きてはたらいっている身体」は、主体としての身体を生きながら、客体としての身体を見ることができると同時に、客体としての身体を対象としながらも、主体としての身体を切り離すことができないというような二重性をもっている。さらに、身体は、用具の身体化に見られるように、皮膚という客体としての身体の境界を越えて拡大するものである。つまり、「身体は単に客観化できる物体ではなく、生きてはたらく機能的身体」であり、「目で見ることができただけでなく、目には見えないはたらくとしての身体」でもある。

身体接触については、拡大し、膨張する「はたらくとしての身体」同士がふれ合うということを想定しながらも、心身両面に関わる広い意味での人と人のふれ合いの原初的形態と捉え、身体の直接的な接触を対象として論ずるものとした。

(2) 授業観察に基づく事例の検討

観察記述から筆者が身体接触と確定した場面を切り取り、局面を詳細に記述した。そこで主題化された行為に内在する実的意味と志向的意味を洞察した。さらに、志向的意味を観点に場면을検討した。その

手順は次の通りである。

- 手順1 観察記述から、身体接触と確定した場面を切り取る。
- 手順2 子どもたちの身体に注目しながら、子どもたちの行為を局面として、詳細に記述する。
- 手順3 局面として切り取った、子どもたちの行為に内在する実的意味を洞察する。
- 手順4 行為に内在する実的意味から、志向的意味を洞察する。
- 手順5 志向的意味を観点に場面を解釈する。

このような手順で得られた結果をまとめたものが表1である。(エスケンの事例のみ)

表1 行為に内在する実的意味と志向的意味

事例	行為	実的意味	志向的意味
事例1	①手を差し出す	相手に手を近づける	接近
	③相手や子ども同士がぶつかり合う場から距離をとる	相手やぶつかり合う場から距離をとる	回避, 異化
	④仲間を助けるために抱きつく	仲間の身体にくっついて引っぱる	触発 同調
	⑤突入してきた子を押す	相手の身体を押す	防御, 侵入 触発, 同調
事例2	②Fは顔を歪める	顔を歪める	怒り 我慢
	③Eに対して抗議する	反対の声をあげる	異化, 同化 共感
	④興奮した顔を見せたが、息を飲み込む	声を発するのをやめる	異化
	⑤Fに視線を向ける	相手を見る	確認
事例3	②Hは激しく押し倒す	相手を強い力で押す	攻撃, 優越
	④Iの所に戻る	相手の所に引き返す	心配
	⑤顔をのぞき込む	相手の表情を覗ようとする	探索, 確認
事例4	③Kを引きずる	相手の手をつかんで動かす	攻撃, 試行
	⑤仰向けになり, 抵抗しない	仰向けになり, 身体力を抜く	信頼
	⑥にこにこ笑いながら, 視線を向ける	笑いながら相手を見る	問いかけ
	⑦にこにこしながらこの姿を見ている	笑いながら二人の姿を見る	承認 応答

身体接触を伴う行為は子どもたちにとって、肌で直接相手の身体や動きを実感できるような感性的な経験である。また、事例から洞察された行為に内在する志向的意味は、自己と他者のかかわりという視点で整理することができる。このかかわりの分析から、志向的意味は、感性的経験から得られる身体を感じを基に生成していることがわかった。つまり、志向的意味は、「痛い／痛くない」、「気持ちいい／気持ち

わるい」というような身体の感じの分節を通して変化しているのである。これらのことから、身体の感じの分かれ目にある「臨界点」という新たな着眼点が洞察された。

(3) 身体接触の意味（存在根拠）の解明

これまで抽出した場面を新たな「臨界点」の観点から再検討し、身体接触の意味（存在根拠）を探った。その結果、以下の4つの意味が洞察された。

①身体空間の編みかえ

身体接触を通して、子どもたちは、自己の安定を保持するための対他的な身体空間を編みかえている。対他的な身体空間とは、他者との関係において生成する身体空間であり、他の個体との関係でとる安定した距離である。この対他的身体空間の境目に想定されるのが、身体空間的バリアである。それは、これ以上入られると「気持ちわるい」というような自己の身体における快／不快の「臨界点」でもある。身体接触を伴う行為は、この「臨界点」を変動させることにより、自己と他者の空間意識の距たりを編み直す契機となっているのである。

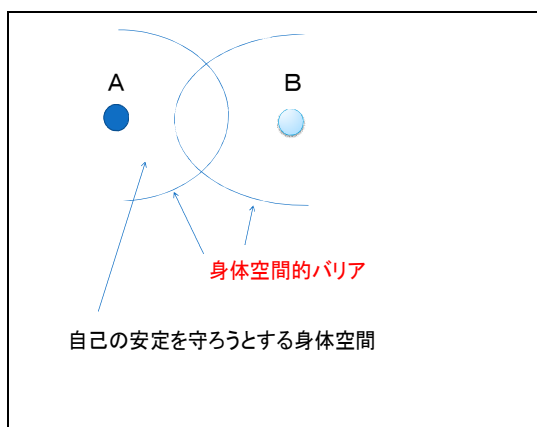


図1 他者に対する身体空間的バリア

②身体の感じのすり合わせ

子どもたちは、直接的に身体をふれ合うような経験をする中で、痛さや重さ、やわらかさやあたたかさというような、数字や形では表すことのできない感じを身体に実感する。このような実感を通して、「痛い／痛くない」、「気持ちいい／気持ちわるい」というような感じの分かれ目にある「臨界点」を変動させている。この「臨界点」は、どこまでがよくて、どこからがだめ、というような行為の判断規準と表裏一体となっている。子どもたちはこの「臨界

点」を基に、行為に対して、「それはしてもよい／よくない」というように判断を下しているのである。つまり、他者との行為の判断規準のすり合わせは、身体の感じによって基礎づけられているのである。身体接触は、この「臨界点」のやりとりによって、自己と他者における身体の感じのずれをすり合わせる契機となる。このことは身体の感じを共有化し、他者をわかり、自己を知ることにつながる。すなわち、身体接触は、自己認識と他者理解の機会を創出しているということである。

③共通了解の促進

身体接触による身体関係の構築は、自己と他者のあいだに新しい関係を築くことにつながると考える。子どもたちは、身体接触の経験を積み重ねる中で、間身体性の原資となる身体関係を絶え間なく構築していると言えるだろう。この身体関係の構築は、自己と他者の相互の身体的わかりを支え、日常の、お互いに分かり合えるという共通了解性を生み出す基となる。また、事例で見られたように、その関係は個と個だけで終わることなく、それらを取り巻く様々な他者と網の目状の拡がりにつながっており、その共通了解もまた、集団へと広がっていくと考えられる。それは、集団において曖昧で漠然としていた行為の判断規準、あるいは行為規範が明確化されることである。つまり、身体接触は、子どもたちの行為の判断規準、あるいは行為規範を明確化、共有化することで、集団における共通了解を促進しているのである。

④運動実践の調整機能

運動実践に関わって、身体接触は、身体を閉じられた状態から開かれた状態に変える。運動実践をより豊かにするためには、対他的な身体空間を縮めたり、消滅させたりすることのできる身体に、そして、身体関係の了解性の高い身体にしておくことが必要である。つまり、具体的な課題に対して解決できるような融通の利く身体、すなわち開かれた身体にするということである。身体接触は、子どもたちの運動実践が豊かになるための開かれた身体へといざなうのである。また、節度ある運動実践を行うためには、身体の動きをちょうどよい強さに、速さに調整する必要がある。身体接触の経験は身体の記憶となり、運動構想実現へ向けてのフィルターとなって、

その調整機能としてはたらくのである。

V まとめ

(1) 身体接触について

身体接触の事例検討による考察から、体育授業で身体接触を取り入れることは、子どもたちの身体を、豊かな運動実践ができる開かれた身体にするだけでなく、子どもたちの身体を感じを基に他者と身体関係の構築の契機となり、かかわりをより豊かにする機会となると考える。

(2) 身体接触による集団性の高まりと学級づくり

教育的観点から、身体接触の意味を問い直してみる。学校現場ではしばしば、学級の雰囲気であるとか、学級の常識という言葉が使用されている。これらは、目で見ることのできない学級集団における了解性の高まり具合を表すものである。それを根底で支えているのが、行為の判断規準あるいは行為規範の了解性ということになるであろう。しかし、実際の日常生活は、極めて多くのかかわりが複雑に絡み合っている。つまり、学級集団における行為の判断規準、行為規範は、目で見ることのできない上に、かかわりの複雑さがあり、容易にはすべてを定型化、明文化できないことがらなのである。したがって、学級集団の行為における判断規準、行為規範は、必然的に、曖昧さや不確さを孕んだものになり、その境界は不鮮明となり、グレーゾーンとなっていると考えられる。

そのグレーゾーンを明らかにする可能性が身体接触にあると考える。身体接触は、身体を感じをすり合わせることによって、曖昧で、不確かな行為の判断規準、行為規範の境界のグレーゾーンを鮮明化、明確化させる機会となるからである。このような境界の鮮明化、明確化は、子どもたちが様々な行為を迷いなく判断することを可能にする。このことは、子どもたちにとって学級が安心して生活できる場となることにつながるだろう。

さらに言うなら、身体で感じるという実感こそが、認識レベルを超えた身体レベルという次元で人と人をつなげ、より深い共通了解性をもたらすと考える。自己の実感を基にして、他者を理解するというような身体レベルでの了解性は、ルールのように一つの出来事に対して一つの判断を共有するというもので

はなく、様々な出来事に対して対応可能な柔軟性の高い了解性である。

以上のことから、身体接触は、子どもたちが実感を通して身体を感じをすり合わせることによって、行為の判断規準、あるいは行為規範を明確化し、学級集団をより深化した、より一体化した集団、すなわち、共通了解性の高い学級集団へと変貌させる可能性を秘めていると言えるだろう。

しかしながら、学級をいい雰囲気にする、一体化するという学級づくりは、教育の諸活動の総体であり、テーマとして取り上げた体育はその一部分でしかない。また、身体接触は実感を伴う身体経験である体育の活動内容の中の一側面でしかない。ただ、身体接触を教科内容の潜在的側面として捉えれば、身体接触活動は体育という教科のみならず、教育活動全般にわたって活用可能なものである。それは、あくまでも、スパイスであり、かくし味的なものではあるが、指導の裏側に存在し得るものであると考える。身体接触を新たな視点として、体育という教科、また、体育のみならず、教育活動全般を捉え直すことは、学級づくりへの新たな接近方法を提示することとなるだろう。

身体接触を視点として、学級づくりに取り組むことは、学級未成立（崩壊）や不登校など、子どもたちが生き生きと学ぶことができないという現代の教育の問題、つまり子どもたちのかかわりの問題に、微光ではあるかもしれないが、光を差し込む可能性を秘めていると考える。

VI 今後の課題

体育授業における身体接触の意味（存在根拠）を明らかにすることで、「子どもたちの身体関係」を構築する新たな視点を示唆することができた。今後は、このことを実践的に検証することによって、研究を深めていきたい。

【参考文献】

- 竹田青嗣, はじめての現象学, 海鳥社, 1993
- 竹田青嗣, 現象学入門, NHKブックス, 1989
- 市川 浩, 精神としての身体, 講談社学術文庫, 1992
- メルロ＝ポンティ, 知覚の現象学I, みすず書房, 1967
- 加藤泰樹ら, 体育の見方変えてみませんか, 学研, 2009